



La centralità del cibo **食の中心的役割**

世界大会資料
2012-2016



概略

1. スローフードとは：活動の歴史	3
2. 何について話す？：食の権利	4
2.1 食から土壌の肥沃さへ	6
2.2 食から水の健全さへ	6
2.3 食から空気の健全さへ	7
2.4 食から生物多様性の保護へ	8
2.5 食から風景へ	9
2.6 食から健康へ	9
2.7 食から知識と記憶へ	10
2.8 食から喜び、社会性、共生、共有へ	11
3. 何をすべきか	11
3.1 大地への回帰	11
3.2 無駄との闘い	12
3.3 地域経済と参加型民主主義	13
3.4 恒久的な教育	14

著：カルロ・ペトリーニ、
共著：カルロ・ボリオツティ、リナルド・ラーヴァ、チンツィア・スカツフィディ



Slow Food®

1. スローフードとは：活動の歴史

スローフード国際大会は、2012年10月27日から29日にかけて、イタリアのトリノ市で開催されます。今回で6回目となります。同時に第5回テッラ・マードレも行われ、世界130カ国、2500以上の食を担うコミュニティと、1500ものコンヴィヴィウムが、日常の活動における政策的・文化的テーマについて話し合います。この活発で多面的なネットワークを構成する人々は、これからの行動をよりよいものにするために、ビジョンとプロジェクトを共有し、討論するために集まります。私たちのアイデア、価値、地域組織（コンヴィヴィウムと食コミュニティ）は、運動のベースとなる、スローフードの最も貴重な財産であり、地域・国家的レベルまたは国を超えた組織として、ネットワークを駆使し、地域に根差した活動を展開し、その普及につとめます。

柔軟性とより高いレベルへの適応能力が、長年スローフードを発展させて来た推進力でした。今日まで、様々な協会としての活動は、ほぼ効率的に行われてきました。もちろん成長過程においては、失敗も正しい判断もあることは認めなくてはなりません。しかしながら、運動の持続性や存続に力を与えている真の活力は、優れた活動を生み出すアイデアとビジョンです。多彩なアイデアがより多く共有され、地域に適用されるほど、協会の展望はより広がります。

20年以上の協会の歴史において初めて、私たちの協会が存在する多くの国々の言語に大会文書が訳され、会員、コンヴィヴィウム、コミュニティに広められ、メディア、文化・政治団体、環境保護や基本的人権・共通財産のありかたに取り組む、多くの組織に提案されることとなります。この大会文書が、国際大会開催前の世界レベルの討論となり、様々な地域の活動とアイデアの力添えとなることを期待します。

大会文書を公開する意義は、友愛のもとに集う私たちの多様性が、世界中に存在する協会の潜在能力を刺激するのに有効だと考えるからです。そしてこの友愛のみが、現代の複雑な世界を包括することができるものなのです。多様性は統治するものではなく愛すべきものです。アイデアの共有は自由の表明です。したがって連帯と多様性は共に発展していくことができるのです。

知性と詩を交えたフォルコ・ポルティナーリ起草の「スローフード宣言」は、1989年12月パリにて運動発起人たちによって署名され、今日では世界各地で共有される私たちの思想の第一章となりました。その獨創性は今日でも健在で、スローフードの歴史に大きなインスピレーションを与えました。喜びに対する権利、生命が求める自然なリズムを取り戻すことの重要性、文化的生物多様性の価値をテーマに、最低でも二世代に渡るリーダーが育成されました。

90年代後半、大量生産により危険にさらされた大切な農業と食の遺産を保護しなければならないという自覚のもとにガストロノミー界が結集し、味の箱舟とプレジディオというスローフードのインスピレーションの泉が誕生しました。絶滅の危機に瀕している野菜・動物の品種と知識の保護をするという活動は、私たちの取り組みを圧倒的に重要なものにしていきます。新世紀初頭、私たちの組織とネットワークは欧州諸国の大部分を魅了しましたが、正念場はまだこれからといえるでしょう。

2004年には、スローフード協会のより野心的な計画として、テッラ・マードレが加わりました。このイベントは私たちの夢を現実とし、回を重ねるごとに全世界に影響を与えました。多くの食コミュニティの取り組みと自覚を促し、ネットワーク内のコミュニティとともに苦難とアイデアが分かち合われてきました。テッラ・マードレは、地球資源を疲弊させ次世代の未来を危険にさらす食のグローバルシステムの不正を明らかにしようとしています。そしてテッラ・マードレは、食の品質という概念は味に関わる価値だけでなく、環境への敬意や生産者への公正な報酬というテーマとも関連しているのだと、私たちに教えてくれます。

「おいしい・きれい・たさい」は、私たちの運動に一貫性を持たせ、運動外部からの信頼と尊重を得ることになった、協会思想が集約されたモットーです。2007年にメキシコのプエブラ市で開催された世界大会では、スローフードとテッラ・マードレに大いなる情熱で取り組んでいるユース・フード・ムーヴメントと食科学大学のおかげで、若い世代がこの革新的な波に乗ることになりました。プエブラから今日までに、テッラ・マードレとスローフードの種は大きく芽生え、この根は他とは一線を画して力強く伸び、数年かけてさらに成長することで、今まで不適切に定義されて来た「ガストロノミー」の限界を乗り越えていくことでしょう。

より広く物事を包みこむようなガストロノミーのありかたを実現し、地球の多彩な文化価値をないがしろにするような考え方を乗り越える力を育てるというテーマのもと、この先何年かに渡って、私たちは唯一無二の挑戦をしてゆきます。当初はただ直感にしか見えなかったものが、短期間で人々に理解されるものになりました。「食の中心的役割」というテーマは、新たな政治・経済・社会性のための大いなる出発点となります。このテーマは、時間とともにスローフード内部だけでなく世界各地で、多くの人々によって支持されることになるでしょう。

「食の中心的役割」というこの大会文書が主張することは、食の権利は人類のみならず地球全体の生命を保障するための、最も重要な権利であるということです。これ主張すると同時に、私たちはどのように行動



Slow Food®

していくかという大切な議論をしてゆきます。延々と続く料理以外を考慮しないガストロノミーという、一般に知られている定義を乗り越える助力となります。この考え方は、節度のある真の喜びが実現され、光に照らされた農業が美と美味を満ち、味覚が風味と腕を組んで行進し、地域経済が若者の将来と地球に配慮する、安全な岸辺へと私たちを運んでくれることでしょう。おいしく、きれいで、おいしい食への権利なくしては、この願いは実現されることなく、人類全体が母なる大地の様に苦しむことになるでしょう。

今回の会議では、今までのように代表団が出席するだけでなく、異なる文化や信条、経歴を問わない個人や団体によって、より広い世界ネットワークが表現されます。私たちは、スローフードとテラ・マードレが、異なる感性を持つイベントではありますが、組織的な垣根を乗り越え、互いに活気づけ強化し合えるという確信に至りました。これは価値ある挑戦です。

世界各地のスローフード・コンヴィヴィウムや、テラ・マードレの食コミュニティで、この大会文書に関する会合や集会を開くことにより、議論はより活性化されることでしょう。この素晴らしい豊かさが、私たち全てに夢を見続けるエネルギーを与えてくれますようお願いしています。

2. 何について話す？：食の権利

食を人間について考える際の中心的テーマに取り戻したいという願いは、もはや政策的にも有効な声となっています。食の消費者の特徴は「カテゴリーに属さない」ことです。食を消費する者が行おうとすることは、全ての人類にむけられています。その意味で彼らの行動は特に重要な政策となるのです。

今日消費者は、食べ物を“買う”者とみなされていますが、食べ物がただ単にいくらで売買されるのかということに興味を示される場合（政策ではなく経済活動として）、食の権利は忘れられてしまいます。しかしながら食の権利は生存にかかわることであり、人権にかかわることなのです。この意味で、私たちは食と水に対する権利について議論したいと思えます。

1966年国際連合総会にて採択された、経済的・社会的及び文化的権利に関する国際規約第11条にある、食の権利の概念は、飢えから解放される権利という思想に関連しています。この条項の第一項は《自己及びその家族のための相当な食糧、衣類及び住居を内容とする相当な生活水準について並びに生活条件の不断の改善についてのすべての者の権利を認める》と書かれ、第二項は《すべての者が飢餓から免れる基本的な権利を有する》と書かれています。この第11条第二項なくしては、実際には私たちが切実な問題として扱うこともないでしょう。ここでは飢餓からの解放について述べられています。なぜなら飢餓は隷属状態を作り出し、何よりも、経済的・社会的な束縛を招きかねないからです。身体的な束縛はしばしば、飢餓の奴隷となった国々の政府自身によるもので、政治的隷属状態に陥る危険性があるのです。

私たちの運動も、飢餓との闘いを宣言しながら時代を切り開こうとしています。奴隷制度に対する闘いの時代を切り開いたように、これ非常に長い闘いです。世界のある場所一幸運なことに数少ない場所一においては3世紀にも及び、いまだ克服されていません。私たちは飢餓と闘わなければいけません。なぜならば、飢餓とは何よりも不公正な状態を表し、同じ権利を持つ人類への横暴と言えるからです。この食の権利が、すべての者に保障されたことが確認されるまでは、「安心する」事は出来ません。

この条項の中には、私たちの注意を引く別の項目があります。それは、《生活水準並びに生活条件の不断の改善》です。これに対して私たちは、《不断の改善》というものに限度があるのかと自問しなければなりません。限度という概念を問いたさなければなりません。食の権利の保障を達成し、飢餓から解放された人々は、たとえ人類の一部の人々がいまだに保障を勝ち得ていないのに、自身の改善に専念する権利があるのでしょうか？もしくは、ある者の改善はまた別のある者の食の権利を危険にさらすことという状態になるのでしょうか？これらの権利を再考することが、私たちの協会の課題です。なぜならスローフードは喜びの権利を保護するからです。苦難や他人の隷属状態の上に成り立つ喜びなど存在しないのです。

熟考すべきこの他の点は、食の権利が生命の権利に関する第6条にない点です。これは一体どうしてなのでしょう？生命は市民的及び政治的権利に組み込まれますが、食糧は経済的・社会的・文化的権利に相当します。それから、水に関する条項はありませんでしたが、国連が《生活と全人権の最大限の享有のため》の本質的な権利として、食用及び衛生的な使用のための安全で清潔な水の権利をようやく批准する2010年に権利として認められました。まるで食糧供給の付属品であるかのようです。この本文では、食糧供給は生命が保有するのと同等の、市民的及び政治的権利の地位が与えられていません。私たちの協会は、食糧供給の権利と飢餓からの解放の権利が、生命の権利に組み込まれるように、具体的な方法で議論を繰り広げなければなりません。そして具体的にこれらの権利を実現するよう取り組まなければなりません。



Slow Food®

この文書は、もちろんその時代の落とし子、とりわけ、人類は物理的な依存、必需品からの解放が可能であるという信念の落とし子であり、“生命”はほとんど抽象的な概念となっています。依存要素の一つである食は、社会的・経済的権利に導入されていますが、そこには修正すべき部分があります。なぜなら食糧はそれを購入できるお金のある人のみに与えられた権利ではないからです。

季節に頼らない生活、さらに言うならば天候や変化に依存しない生活という夢は、技術的・財政的発展という巨大な柱に根差す多くの文明の自由に関する理想郷でした。十分な技術と貨幣を得ることのできた国々は、食の権利自体が保障されたときみなしたでしょう。市場に導かれた食品産業と工業型農業は、このビジョンの重要な擁護者となったのです。しかしながら、人間の生存自身に密接に関与した普遍的権利に、条件を付けることはできません。これでは技術とお金のない人は食の権利をどう保障できるでしょう？

それだけではありません。あの種の農業が地球と人間の健康に与えた害はもはや明らかです。そのシステムが、すべての人間らしさを配慮しなかっただけでなく、むしろただつけを払わなければならない事ばかりに専念しました。そしてすべての者の資源を、その恩恵を受けなかった者の資源も破壊し、より弱い立場の人々が本質的権利を達成する事から遠ざけることに貢献してしまったのです。

食糧供給権利の定義は、国連人権高等弁務官事務所により調査され、国家に対するいくつかの義務を断定しました：

- 尊重の義務、すなわち市民生活の糧に干渉せず、彼らの自己供給能力を尊重する。
- 保護の義務、すなわち食の安全、環境保護、土地の所有に関する規範システムの確立
- 実行の義務、すなわち適切な政策を通して、弱者が資源にアクセスできるようにすること。また極端な場合、少なくとも飢餓からの救助。

過去 60 年で市場の国際的組織が招いた、産業型の食農システムが有害であることを証明するのに、最初の義務だけで充分でしょう。スローフードとテッラ・マードレにとってこの義務は伝統的・持続的農業の尊重に関係しており、農業や生物の多様性、資源、文化的多様性を常に守ってきました。そしてこれらの担い手はいえ、小規模生産、女性、高齢者、先住民達なのです。

スローフードの経験として、プレシディオに始まり、近年のテッラ・マードレの生物多様性保護があります。これらの経験により、品質・アクセス・食の多様性という意味で、地域の文化を尊重せず、国際市場における最善のポジショニングを目的とした大型市場で、少ない品目の製品を大量生産するような仕組みでは、食の安全は決して保障されないという事を学びました。

この観点から、最近アフリカ食の権利に関して最も高い代償を払う大陸—で私たちが直面した現実、それを模範として、この政策をひたむきに続けてゆくように勇気づけてくれました。アフリカに 1000 の菜園を、ランドグラビング(土地争奪)との闘い、ファーマーズ・マーケット、食コミュニティ、先住民の権利など、アフリカのスローフード会員達の闘いでは、地元のコミュニティとともに働くことが、食の権利を保障するのに必要不可欠であるという考えを広めました。アフリカの事例そのものが、国境を越えた友愛精神となり、運動内部で働くアフリカのネットワークの取り組みを力強く支えていくことになりました。

私たちスローフードは、アフリカの将来はその手のうちにあることを大いに理解しています。アフリカの主な問題の原因は、新旧の植民地政策に根差していること忘れずに、アフリカの将来は世界の将来であることを認識しなければなりません。相互関係と恩恵を土台に、私たちの思考を脱植民地化することは、間接的に私たちが暮らすコミュニティを支えることであり、すなわち地球各地の食の権利を支えることになるのです。食の安全と食の権利は事実、文化的多様性の尊重においてのみ実現します。それは、コミュニティや地域の小さな経済の心身の福祉を創造し、地域への配慮と活動経路、人間らしい成長を再活性化させるに及び、最終的には模範的経験としてどこでも適応、再現が可能なものになることでしょう。

水の権利・食の権利・飢餓からの解放を政策の中心に据えることは、市場の代わりに人間を中心に置くことを意味します。これは共通財産を保護するために提案された政策課題であり、私たち協会が絶えず重要な決断とともに実行し、様々なレベル、多くの現場で取り組んでいくべき分野であると考えています。

餓死撲滅の闘い、アフリカや、南アメリカ、アジア、アメリカ、大都市や農村において、餓死者のいる地区をなくすための闘いの火蓋を切らなければなりません。これ以上差し迫った闘いはありません。これ以上に優先すべきことはありません。何よりもまず飢餓について語らなければ、未来や権利や持続性について語る事はできません。FAO(国連食糧農業機関)は、年間 340 億ドルあれば飢餓を一度に決壊するのに充分であると見積もっています。欧米の銀行を金融危機から救出するために出費された金額に比べれば、こっけいなほどの小額です。私たちのやるべきことは、飢餓への闘いが世界的政策の最優先事項になるよう、それぞれの政府に各自が働きかけることです。これ以上待つことはできません。



Slow Food®

2.1 食から土壌の肥沃さへ

食は私たちが自然の一部であることを日々認識させてくれるものです。私たちは自然に属しており、最も大きな生命システムである自然の中に存在しているのです。食べ物は自然から、大地から作られます。それが私たちを通して文化となり、そしてまた常に大地を通して自然に帰る。まさに私たち自身のように、最後には大地に帰るのです。

私たちの代謝は全ての生存するシステム、動物・植物・微生物・大地のそれです。古代の詩人達は、代謝を《生命の呼吸》と定義していました。大地から由来するものを食べ、それを消化しエネルギーを吸収し、大地に返還する。私たちが住む惑星もこのように機能しており、代謝は生命を保障するものなのです。

土壌は生物により成立つされるシステムで、土壌の肥沃さは有機体である生命に基づいており、私たち個人と地球の生命を保障するのに必要不可欠です。この点において食の生産は、双方にとってとても重要な要素なのです。土壌は、私たちがそこに返すものを摂取し消化して再度返還しますが、この断続的なサイクルの関係性は、科学的にもまだ完全に説明されていません。土壌の肥沃さを脅かす、つまり生存する生物のシステムを脅かし損なう事は、すなわち、大地の《生命の呼吸》、私たちが住む地球の生命と私たち自身の生命を危険にさらすこととなります。

何を食べるかを選択する事は、今日ますます脅かされている土地の肥沃さを保護する好機になります。世界中が破壊的な栽培や飼育により危機に陥っています。工業化農業や大地に浸透する化学物質の乱用、土壌が代謝しきれないごみや産業廃棄物による排水や汚水…。

しばしばその他の手口も文字通り土壌を殺めています。豊饒な大地に設置された太陽光発電の様な代替エネルギーの巨大装置も含め、ダム・橋梁・道路などの事業建造物もその手口となります。時にこれらの建造物がもたらす恩恵は、豊かな大地から決定的に失われたものを取り戻すのに充分ではありません。しかし、地球の多大な地域、特に一層“発展した”地域には、土壌の肥沃さのより大きな敵が存在します。野蛮な都市化とセメント建築です。世界レベルの問題の程度を表す十分なデータはありませんが（農村部の多くのコミュニティは、たぶんまだその敵に侵されていないか、単に部分的なものでしょう）、世界の多くの地域では、家屋・ビル・ショッピングセンター・工業施設の建設により、毎日広大な量の有益な土壌が運び去られています。これらの土壌は食物を生産し、《生命の呼吸》を保障してくれるはずが、ただそこに荒地となって残るか雨水を吸収させるがままになっているのです。このように「消耗された」土壌は永久に失われることとなります。

これらの巨大大業を前にして、地球の純粋な住民として個人的に異議を唱えることは難しいでしょう。しかしスローフードやテッラ・マードレの運動を通してなら、もっと有効に発言できるようになります。さらに他の組織と協力すれば、共通財産として土壌の豊かさを守る人々の言いたいことを、もっと大きな声で届けることができます。また、土壌の豊かさを尊重し、それを保持する食を、栽培し選択することは難しくありません。これこそが食の生産者・共生産者としての私たちの武器なのです。食べるというシンプルな行為は、土壌の豊かさは神聖なものであり、一度殺されてしまった大地が生命を取り戻すことは、ほぼあり得ないということを理解していない人々へのメッセージにすることができます。私たちの生活の中心に置かれた、おいしく・きれいで・おいしい食で、今後何世紀もの《生命の呼吸》を保障できるようにしましょう。

2.2 食から水の健全さへ

人間の体と同様に、地球も約 70%の水からできています。私たちが暮らす土地には水が通り、水を受けられています。私たちの全ての行為は、水に関する場所、海・川・湖・または単純に空気に影響し、その含有物質を受け渡します。

自然に関する諸問題の分析をする学際的アプローチでは、水は無視する事ができません。食や農の産業であっても、また運送から工業、建築から観光に至るその他の人間活動の分野であっても、私たちの行為が、水を内包する大地や海にインパクトを与えていることを、私たちは理解しなければなりません。

このため、スローフードは、一見直接テーマに関係していないような問題についても、度々意見を述べるよう求められます。私たち消費者・使用者の行為には、政治家や企業化の行為と同様の責任の割合があります。



Slow Food®

まずは“water footprint”という用語について論じ、学ぶ必要があります。つまり私たちはどれだけ、どのように移動するか、どれだけ地面占領(したがって防水加工)を引き起こしているか、どれだけの水を節約せずに無駄にしているか、私たちが選ぶ食べ物にどれだけ水を“費やした”か。地球の水脈は一つです。私たちが飲む水の一滴のいのちは、海のいのちにつながっています。海に辿り着く前に私たちの街を流れる川は、私たちの産業に使用される水につながっています。

最低でも三つの考慮すべき点があります。

第一に、食と関連性のない全ての人間活動を含むことができます。道路建設、運送、産業活動。これらすべての活動には水が必要であり、水に影響を及ぼします。

第二に、代替エネルギー産出も含めた、食農に関連する全ての活動が挙げられます。畑の耕作や家畜の飼育には地下水を激しく汚染する可能性があり、水源問題でかなり費用がかかります。一般的に大規模栽培や飼育は、伝統品種を扱わず、特定地域には不適切なため、水とエネルギーの大量なインプットを必要とし、かなりの量の水の無駄を引き起こします。それ以外に、大量のCO₂のアウトプット(もしくはCO₂の蓄積未遂)、水のサイクルの妨害という余波、気候変動への影響とそれが引き起こす更なる障害要因を誘発します。工業食品の流通形態プロセスにも同じことが言えます。

直接水から届く食品に関する第三要素として漁業、特に海洋漁業があります。地球レベルの海洋は憂慮すべき状況です。漁業は、地上の人間活動に影響を受けているだけでなく、多くの水産資源が絶滅の危機に陥り始めているという圧力に苦しんでいます。産業レベルの漁業には、どのような被害を引き起こす可能性があるのか、またそれに反して小規模沿岸漁業は、どの程度の持続性を保障する事が出来るのかを理解するために、規模について考慮する必要があります。他方で、地上で実証された生産モデルを水産業にも適応させる試み(養殖)は、いくつかの例外を除いて、生態学的インパクトとして、今のところ漁業の実用的な代替策とみなすことができないことを示しています。

これら全ては私たちに関わることであり、この分野におけるスローフードの取り組みを今後さらに養わなければなりません。

2.3 食から空気の健全さへ

私たちの街の空気中の砂塵と重金属の水準は、年間の大部分において警戒値を超えています。肺疾患や有毒物質にさらされる皮膚疾患が増大し、腫瘍の割合も増えています。私たちの生活の質とともに、空気の質は絶えず低下しています。健康に関する代償(結果として金銭面)は一層家計と国家予算にのしかかっ

てきています。2010年には世界中で1億1500万台ものコンテナの移動がみられ、そこにはコンテナを利用しなかった鉄道・車道による貨物移動が付け加えられます。このことが意味する事とは、グローバルな取引が地上の空気の質にもたらすインパクトは凄まじいということです。この状況からすると、大量の食品が畑から食卓にたどり着くために世界中を駆け巡り、既に度を越した数の食品の流通量をさらに増大させるのに貢献していることとなります。

食の生産は、持続可能で、生活の質、環境、何よりも空気に対して好ましいものでなければなりません。これを可能にできるのは小規模農業のみです。単一栽培では、食を商品とみなし、専ら価格による価値で規定されるため、法律上移動や化学薬品取扱のインパクトを重視する事ができません。単一栽培は、プランテーションの近くに住む人々や環境にとって危険です。空気の質は化学物質(肥料や農薬)により低下していて、この負荷はプランテーションから世界中に商品を運び出すために排出される巨大なCO₂量により、さらに重くなります。

これには耐えることができないし耐えるべきではありません: 私たちが呼吸する空気の健全さに関わることで、私たちの生活の質がかかっており、さらには私たち自身の生存にもかかっているのです。私たち各人の食卓に、数万キロの距離を超えて生産され、無意味な長旅に耐えられるよう時には長期間保存された食べ物がのぼることを見越した農業システムを、私たちの未来も相変わらず傍観するなど考えられません。私たちは、環境にとって脅威となってしまった農業の原則を根本的に変えるよう議論したいし、しなければならぬのです。



Slow Food®

2.4 食から生物多様性の保護へ

生物多様性に関する問題は、いまやスローフードとテッラ・マードレの政策の中でも優先されたテーマとなっています。この生物多様性という言葉は、地球上に生存する全ての形態の総体を意味します。つまり単一品種だけでなく、生態系全体です。2011年から2020年の10年は国連が生物多様性の10年と宣言した年であり、スローフードも主役の一部をこなす予定です。

私たちは絶えず、おいしく、きれいで、おいしい食を奨励して来ました。それは野生のものから農作のものまであらゆるレベルの生物多様性の喪失と闘うための特別な手段を手に行っていることを意味します。地元の食と良質な小規模生産の促進は、絶対的な意味では生産性に劣るかもしれませんが、何千年の時を得て発展した品種は、生物学的・気候的に特定の環境に対する重要な適応能力が備わっているため、それら動植物の品種を保護する事を意味します。この点を繰り返し主張し、良質な食は生物学的・文化的な生物多様性の保護のもとにあるのだという自覚と認識を増やさなければなりません。

気懸りなデータに、政治レベルでの注目も増しています。このリズムを続ける場合、世紀末には全生物の品種の10%は絶滅する事になります。必要なのは、この現象の範囲や規模を理解するための根本的な要素に触れることです。絶滅の危機に瀕しているのは野生品種だけでなく、特に食の生産のための飼育・栽培用の品種にいます。《FAOの調査によると、農業作物品種の75%が今日までに失われており、世界食糧の4分の3はかろうじて12品種の野菜と5種の動物に依存する》[生物多様性に関するスローフードの見解書類]。これが示す事は、私たちも一部を成す生命システムの基土台をますます虚弱にしており、自然資源の無分別な使用により増え続ける諸問題や、回避不能な変化に適応・対応できる資源はますます減っていくということです。

生物多様性は、生態系の中で他の手段では再現できない働きをし、私たちはそれなしでは生きていけません。マクロな見解を挙げると、生物多様性の高いシステムは、気候変動に正しく反応する事ができ、それ自体が気候調整に重要な役割も果たします。つまり、気候を安定した状態に保ち、地球温暖化を緩和し、水源地質の不均衡から地球の広範な部分を守っています。これに生物多様性の美的価値(そして経済的価値。なぜなら私たちの観光業の多くは例えば、田園風景に価値があり支えられているのです)、それから精神的価値(集団の健康の保護という点で)、機能再生の価値も付け加えてください。偶然ではなく、生物多様性の高い地域では、土壌の再生が最も多くそして速く行われ、人間の活動により人工的に汚染物質に侵食された場合のインパクトは、より穏やかなのです。

生物多様性は、動物・植物の品種のみに関連した問題ではなく、人類の営みに無限につながっています(料理、食だけに限らず職人仕事一般、伝統医学、儀礼・儀式、風習、祭典...)。これらは生産加工技術や栽培認可などを考慮して生き残ることはできないのです。

地球の存続を危険にさらす生産システムには、スローフードとテッラ・マードレによる食のビジョンで対抗させなければなりません。食は、生物多様性にとって脅威となつてはなりません。今日ではしかし一逆説的ですが非常に現実的です。多くの品種の生命への主な脅威は、生命に必要な不可欠な要素である食の生産そのものという、歴史的な瞬間にいるわけです。工業型農業、単作農業、化学農業といった大規模に生産される食は、この惨事に重大な責任があります。一方で、在来品種と技術をもとに、化学薬品の乱用や水資源の無駄使いをせず、量産を目的としない持続可能な地域の農業は、現在の流れ修正できる有効な手段です。私たちはこの道を進み続けることはできません。もしも農業を救い、地球を救うことができるとしたら、それはローカルレベルで、伝統・在来品種と小規模生産に特権を与えることによってのみ可能なのです。その他の道はありません。テッラ・マードレの食コミュニティは、この徳の高いモデルの模範です。

伝統・在来品種の問題について、追加考察が必要です。種は各農業の基本ですが、生産物を定めるだけでなくそのモデルも規定します。単一栽培、市場に方向づけられたいわゆる産業型農業は、種自体の生産性パフォーマンスに基づいており、場所や気候に関わらず全てが同形同一でなければなりません。例えば人工的な交配による穀物のF1品種は、第一世代は最良の結果をもたらしますが、外界からの最大の補助(水、寄生虫駆除剤、殺虫剤)を必要としています。なぜならそれらは、自然の品種ではなく伝統手法で繁殖させた在来品種に見られるような、特定地域の条件や気候の挑発に対し、優れた柔軟性をもって反応し抵抗力に変える変異性が内在されていないからです。持続可能な農業、資源に与えるインパクトをできるだけ抑えて、むしろ良好な状態を保持するよう貢献できる農業には、伝統的な種子が必要であり、繁殖・増殖・改良できる能力を保つ必要があります。これらの種子はますます忘れ去られ(知られなくなる)、ますます入手困難になり、種子に必要な防衛能力は一層限られてきています。拡大している数の人々に菜園を造るよう呼び集めることはできますが、これらの菜園がただ商



Slow Food®

業品種のみを栽培するとしたら、実際の機能は半分しか果たせません。福祉や経済、風景にとっては有効でしょうが、種子の生物多様性の保護と環境保護という点が全く欠けています。今なお伝統種子の繁殖・増殖のできる多くの農家、自分達が購入する物の真正に配慮する多くの消費者、利潤のためだけでなく地球への思いやりを持って働く意思のある労働者、これら全ての人々が協力し、伝統的種子がなければ食の主権も存在しないという自覚のもと、種子の重要性に注目を集めるという第一目的を持たなければなりません。遺伝子組み換え品種については、大打撃を与えている極限状況ですが、種子の特許に関する企業の関心は遺伝子組み換えから慣例の種子に、種子からさらに商品へと移っています。そのため、生物多様性の保護と食の主権の実践という目的において、伝統品種の価値を強く再主張しなければならないし、今となっては至る所で進行中の種子と能力の喪失を抑制する手段を見つけなければなりません。

2.5 食から風景へ

スローフードの運動に関わり、テッラ・マードレのネットワークに属しているならば、それは単に食糧を摂取する方法に配慮しているだけでなく、栄養を摂るにはおいしく・きれいで・たっさい手段で、私たちの生きる地球に配慮する事が不可欠であると自覚していることを意味しています。私たちは、私たちが生き、働く場所を愛しています。私たちは、再生可能な方法で資源を利用し、農業を通じて改善の可能性を探しながら、それらを守る義務を感じています。私たちの大地を守る義務を感じます、なぜなら何かや誰かの面倒をみる人は、それを愛しているからです。これが、私たちの地域にも感じることで：愛。街に暮らそうが農村に暮らそうが、私たちは、生産・流通・食の消費活動が、生態系を決して悪化させたり、危険にさらしたり、破壊することのないシステムの中で生きていたいと思っています。

通常、おいしく・きれいで・たっさいという意味で豊かな場所が、私たちの好む場所です。美しい場所。私たちが耕作する田畑であったり、動物が放牧されている牧草地であったり、農村・都市を問わず、私たちの菜園であったり、アイデアや情報を交換したり、誰かと知り合うために行く市場だったり、もっとローカルな場所ならば、友人たちと晩餐会や団欒を行う場所。食がおいしく・きれいで・たっさい時、食に関わる全ての物は、視覚的な美に変化します。自然を尊重する草原、林、森、菜園、郊外地区、村、街は、私たちの好きな日常風景を作り出します。それは毎日身近にあってほしいものだし、旅行の際には訪れたい場所なのです。風景とその美は、私たちがよりよく暮らすための手助けをします。心地よく感じさせてくれる財産であり、より快適な生活を与えてくれ、私たちの土地への誇りを高めます。食を通じて美をもたらす機会もあるのです。その美が常に私たちを取り囲み、未来の世代もそれを享受できるように願います。美はオプションではないし贅沢でもなく、人類の発展に相反するものでもありません。産業社会では、行き過ぎた美が発展に関する誤解された認識の犠牲にされました。そして“発展”の被害者は農村社会にも多くみられ、無関心と放棄または農業活動の度を越えた拡充に苦しんでいます。このような農村にも、美はもうありません。

それにひきかえ古代には、美が常に追求され“耕されて”いました。私たちの先祖はいたるところで絶えず美を探究していたのです。古の時代では美とは人間の福祉に不可欠であり、文明と真の発展と同義語なのだ、今日再び主張しなければいけません。私たちの周りに美が多くあるほど、より多くの真の福祉も存在します。風景の美は、土地がどれだけ健全で、人間の活動と自然の豊饒のバランスがとれているかという指標になります。調和が常に美の指標であったように、美は調和の指標です。美とは価値です。絶対値でありまた食の価値の一つでもあります。おいしい食は喜びを与えるだけでなく、美の創造者となり保護者になります。私たちの住む風景の質は、私たちの食のシステムがどれだけおいしく・きれいで・たっさいかを示すものです。このために守られるべきものなのです。

2.6 食から健康へ

「おいしく」食を食べることこそは健康の秘訣です。多くの食の役割、食が方向性を示しているすべての権利の中に健康というものがあります。それゆえに食はそれらの権利と運命を運命を共にしてしまいます。

市場に支配された近代世界では、食や、食に関連した価値と権利も商品と化してしまいました。食べ物は売り、買い、無駄にされる。健康にも同じことが起こっています。裕福な世界において、高度に産業化された食によってもたらされるダメージが、家にもりがちな生活スタイルによってもたらされ、肥満、糖尿病、心臓疾患や血液循環機能障害に見られる病気が、疫病ともいえる緊急事態を招いています。これが健康の無駄でないというなら、一体どういうことでしょうか？

裕福な世界では、回避可能な疾患のための治療薬も発達しています。しかし病気を回避する事は市場では有効とはみなされません。そのため教育や予防、研究や調査に回すことができる財源は、流通チャンネルを



Slow Food®

みつけれられません。消費者の食の現実に対する判断能力はますます薄れ、病気になる人は増えるばかり、そのためさらに薬を買う。この意味で健康はもはや商品なのです。

お金がないところは健康に飢えているので、市場にとってはこのエリアには興味がありません。裕福で無知な消費者を作ることは一教育に投資することなく一大きな利益になります。コレステロールの高いまずいものを食べつつ、その後は薬剤や栄養補助剤を買うことができます。これらは食文化なくしては、ほぼ確実に何の役にも立たないけれど、市場にとっては問題ではありません。それどころか、世界の別の地域ではその間、貧しいものがマラリアを患っても薬を買う事ができないけれど、その薬の研究がなされることはありません。市場は自身が引き起こす被害を補償することはありません。“豊かさによる病”の増大にも、飢餓や栄養不良と同様に異議を唱えられるようにしてはなりません。

また健康を公共の福祉であると考えする必要があります。個人の健康は相互関係システムの一部を成し、それはコミュニティの健康と、地域、個人、未来そのものを慈しむ能力の一つなのです。

健康は個人的な事象ではありません。もちろん私たち自身の健康の権利はありますが、私たちは、自己の健康の唯一の責任者でも健康不在の唯一の被害者でもありません。集団の健康なくして個人の健康もないのです。

健康は万人の共有財産なのです。それが現在の世代に関わるだけでなく、未来にも関わってくるからです。私たちは、現在の私たちが活動し栄養摂取している世界と直接関係する健康の割り当てと環境とを、未来の世代に譲渡します。その他の公共福祉に該当する事柄は、健康にも該当します。

- すべての人はそれを手に入れる権利がある
- 全ての人にはそれを無駄にしない義務があり、その更新、保存、公正な分配のための条件の振興を図る義務がある

自分の体に不適切な食を選ぶことによって、心臓発作を招くような状況を作り出す生き方は、例えば気候変動を悪化させ、干ばつを引き起こすような食糧システムを支援する事と同じことです。自分が異なる振る舞いをしていたら、別の誰かが健康でいられたかもしれない。干ばつが起こる世界で暮らす彼らには、健康を取り戻すための十分な資源がありません。しかし彼らにもたらされる健康被害は彼らの責任ではないのです。

消費市民への適切な教育と一体化した持続可能な食の生産は、健康を作り出し維持するのに貢献します。このため健康に関する分野も、スローフードの守備範囲であると考えます。

2.7 食から知識と記憶へ

人類の歴史上、食の生産・保存・分配は、時間と空間を超えて計りきれない知の財産と、順応性と効率を保障する不断の変遷を築きました。記憶を保管し、これらの知恵を世代から世代へ受け渡すことは、過去の過ちを繰り返さないために有効な手段であり、新境地・新機会開拓時にも重要な条件となります。これらの知恵は、何世紀もコミュニティで培われた重要なもので、これらの知恵を蓄え伝えてきたのは、主に女性、農家、お年寄りたちでした。

在来文化と同様に、今日これらの多種多様な知のシステムは、伝統的な知恵と定義されます。時間とともに、実践とともに、それらは強化され、家族やコミュニティ内に口頭で伝えられてきましたが、産業革命の出現、巨大企業用の科学的な食品管理や商標登録を介した知の商業化の出現により、公認の科学と伝統的な知恵の間の対立が深まりました。これは公共の福祉にかないません。スローフードは、この二つの知の王国間の対話と議論、相互交換のみが、持続可能な将来を私たちに夢見させてくれると考えています。そして対話は、相互の能力と特質を称賛しつつ、同等な立場で行われなければなりません。

新たな技術はこの対話と衝突しません。むしろ伝統の知識の普及と目録作成を発展させることができます。ポツェンツォの食科学大学では、「記憶の穀物倉庫」と呼ばれる研究テーマを、教育プログラムに組み込んで、この課題に取り組んでいます。生徒、食コミュニティ、コンヴィヴィウムは、視聴覚機器を用いて口頭伝承、饗宴の習慣や儀式の情報を集めることができるようになり、知の伝承に興味を持つ多くの人々がこの情報を自由に使用することができます。この小さな大学は、テッラ・マードレ開催初年度の 2004 年に誕生し、私たちの教育プロジェクトの一環となっています。世界 62 カ国から集まる学生たちの存在は、活力・持続性・プロジェクトとアイデアの発展のための最高の保証となっています。

スローフードの世界では、若き農業従事者のための養成学校や、アイルランドのお年寄りによる大学という



Slow Food®

個性的なアイデアの様に、他の大学内でも知識を公開・共有するための様々な方法が生まれています。多元主義と知識体系の多様性は奨励されるべきものであり、それはコミュニティーの味覚に尊厳を与えることができる包括的アプローチと変革を保障します。このように、コミュニティーが食の権利を回復できるよう、共通の福祉に寄与し、時間の中で成長してきた知識の権利も、同様の信念を持って認識されるべきです。テッラ・マードレのコミュニティーにおけるこれらの知識の交換は、私たちの運動の最も大きな、そして重要な使命です。未来の世代と自然界の福祉のため、コミュニティーの食の知識を識別し循環させることなく、参加型民主主義は存在しません。知識の共有のない食の権利は、単なる幻想でしかありません。

2.8 食から喜び、社会性、共生、共有へ

スローフード運動の基礎となる組織構造はコンヴィヴィウムと呼ばれており、饗宴、食卓のまわりに人が集まる場所を意味し、食を共有するためだけでなく、対話や考察、団欒の喜びを促進するためという意味があります。これはおそらく、食の文化を強化できる、優れた側面でしょう。団欒、アイデアや経験・情感や好意的な冗談のやり取り、仕事の取引上の食事における関係強化に至るまで、これら全ては食の共有を通して行われます。

先世紀 70 年代半ばごろ、偉大な現代思想家の中の一人 Ivan Illich は、功利主義と多くの人々の仕事への意欲をそぐ生産高方式に対抗して、饗宴と饗宴社会の新しい概念を広めました。饗宴は、環境を減退させることなく効率を生み出し、共通の福祉の追求と各自の将来を形づくる能力を向上させます。小規模農家の生産、地域に根差した地元経済、食の職人をよく見てみると、彼らは饗宴の真の主演となっていることがわかります。スローフードとテッラ・マードレの運動が世界の農家・漁師・牧羊者に保障するこの支援は、もはや機能しない現在の食のシステムの変更を促すための最も際立つ活動です。

饗宴の最高の表現は、生産者と自覚ある消費者との関係に見られます。もはや受け身な消費者としてではなく、自覚と責任ある共生産者。新たなファーマーズ・マーケット、コミュニティー支援農業もまた、真の団欒と新たな饗宴の形です。これは新たな政策分野で、経済だけでなく世代間の関係を変化させること、若者に大地への回帰を促すこと、またはもっと貧しい国々においては若き農業従事者に尊厳を与えることができます。

世代間の知識の伝承もまた新たな饗宴の形です。

私たちの基礎組織となる饗宴に名前を当てる事が重要です。なぜなら饗宴中に、饗宴の喜びだけでなく新たな饗宴の形式を実現する事が可能だからです。私たちは喜びの権利と社会的・文化的取り組み、もっといふなら共有された取り組みの喜びを活かす唯一の運動組織です。

饗宴の二重の意義(食と団欒)は、人類の福祉に不可欠な要素であり、広大な創造性と世界の異なる地域の多彩な方法で表現する事ができます。

スローフードの全ての運動は、この創造性を熱意を持って尽力するよう求められています。

3. 何をすべきか

ここまでに行われた考察によって分かって来たのは、どうしたら検討されたテーマのそれぞれを、食が私たちに最良の形で提供できるのかというだけでなく、放棄できない人権の領域まで拡大することができるのかということなのです。土壌の肥沃さ、空気と水の健全、生物多様性、ダメージをうけていない景観、健康、知恵と記憶、団欒は、権利であり、それらを買う事ができる人のみに与えられた特権ではありません。それらをもう一度議論の対象とするのは私たちの義務とも言えるでしょう。しかしながらどのような手段で？

第三章は、今後数年間、私たちの力を捧げる必要がある取り組みを、次なる使命として書き出したものです。

3.1 大地への回帰

人類にとって一仰々しいかもしれませんが、私たちが話しているのは人類全体についてです—大地への回帰は避けられません。私たちにそれは実行する全ての手だてを持っていますし、全ての人々がそれを実現可能な多くの方法があります。

大地への回帰の最初の方法は、具体的に耕作しに帰る、つまり農業を行う事を意味します。世界の農村は人気なくなり、人口が減少しています。若者はますます彼らの両親の仕事を受け継ぐ必要を感じなくなり、もう何世代も土地を耕作しなくなり、農業という職業が若者たちにとって、未来の人生の選択肢とみ



Slow Food®

なされることがとても稀になっています。

この過程を余儀なくされた産業化社会では、農村は次第に空虚になり、後に車で埋めつくされました。ほぼ同じ速度で産業途上国でも同じ現象が起こっています。国連のデータによると、2009年には世界人口の半分以上は都市に住んでいるということが分かりました。3年前には歴史的な追い越し(田舎部・農村で 3410 億人に対して都市部 3420 億人)が起こり、統計学を元にした見通しもこの傾向を裏付けています。私たちの食べ物を誰が栽培するのでしょうか？

私たちは農村に人が必要としています。若者の農業回帰の振興を図る必要があります。それには、土地や道具が利用可能であること、インフラ整備、事務手続きの簡素化、資金調達、正しい教育と伝統的知識の伝承保障、などが必要です。しかし何よりもまず、農作業という最も有益で、繊細で重要な、一もっと付け加えるなら一現存する最も美しい仕事の一つへの尊厳と誇りを取り戻すことが重要なのです。自分自身と隣人のために食を生産する事は、食を生活の中心におく最も純粋で完全な方法です。それにより、自然体系に調和・適応し、敬意を持って自然体系を保存・発展させることができ、世界でも少数の仕事のみが獲得できるような、生活の糧と喜びとなるのです。

しかしながら、客観的にみて、全ての人が農業をできるわけではありません。例えば都市部に住む人々は、その手段を持ち合わせていません。しかし都市部でも「大地に回帰する」ことは可能です。むしろこれこそが、都市に住む人口が農村に住む人口をはるかに超えるような時代に、必要な解決策なのです。また一方では「街を耕す」ことができ、他方では共生産者になる事ができます。たとえ実際に栽培しないとしても、全ての人が農民に戻ることができるし、戻らなければなりません。

街を耕すことは難しいことではありません、菜園は最も即効性のある手段です。共同のまたは個人の都市菜園は、スローフードやテラ・マードレのネットワーク内に多くの例があります。都会の緑は、装飾的なだけでなく生産的にもなれます。郊外農業は、ファーマーズ・マーケットや野菜の共同購入グループなど、街にも地域の食物流通拠点を築くのに欠かせませんし、中心街から少し離れた郊外や都市近郊部にも季節の地域の食べ物を届けることを可能にします。古くからの伝統的な知識や学識への回帰、生物多様性ととも消えつつある職業への回帰、生物多様性に関わる農家の仕事への回帰など、食の形態自体も大地への回帰を必要としています。職業の回復・再習得・支援や職人技術をもっと根深い意味で生かすこともまた、都会であろうが農村であろうが、大地への回帰のために可能な別の方法です。

しかし、大地への回帰で最も簡単なことは、誰にでもどこにいてもできます。それは、食べ物の選択です。つまり「食べることは農業的な行為」だという自覚をもつことです。これだけで、私たちは受け身な消費者から活動的な共生産者へと変わることができます。食の知識を、それを生産する人と共有し、おいしく・きれいで・ただし方法で生産していることへの努力に感謝して、適切に支払う。地域の食をできる限り探し求め促進する。子どもたちに生産的な方法と特徴を教える。共生産者になるという事は、内側から農民になる事、食を繰り返し学ぶこと、それこそが、たとえ直接大地を耕さなくとも、大地へ回帰する事になるのです。共生産者は、農村へ戻る人々を支援し、食がその名にふさわしい生活のための不可欠な価値の伝承者であり続けられると信じています。

大地への回帰はまた、政治的な問題でもあります。私たちそれぞれの国において、政治は、政策の選択と方針を正しい方向へと導く責務を負わなければなりません。政策に介入し、問題の緊急性を主張し、適切な決定機関に提示し、ある選択について政治が負う責任を強く求めるのが、私たちの任務です。

3.2 無駄との闘い

今日地球には約 70 億人が住んでおり、2050 年には 90 億人以上になるともいわれています。これは残念ながらほとんど全員の予想するところですが、現在 10 億人もの人々が、適切な食事ができていないことを考慮すると、この予測はかなり暗く見えます。

ますます多くの“権威ある”声は、全ての人の飢えを満たすには、生産性を 70% (その間にも耕作地は減少しますので) 上げる必要があるという事実にもかかわらず力説しています。そうです、そこでずば抜けて生産性の高い野菜品種を作るための種子の遺伝子操作のレースが始まり、食肉を半分の時間で成長させるよう抗生物質とホルモン剤で飼育する事に意味を与え、耕作地を作り出すための森林破壊(とはいえ、数シーズンのサイクル・回転でその肥沃さは失われますが)が不可欠になっているのです。

つまり、人々が餓死の危機にさらされている時、誰が生物多様性や動物の福祉、気候変動などについて心配していただけるのでしょうか？

この分析には根本的な要素が欠けています。それはうわべだけの問題ではなく、悪意をもって無視されている要素ですが、私たちは今に自分の胃を縮めざるをえないということです。今日大地では 120 億人用の食が生産されていますが、その 40%は、どの食卓にもたらされることもなく、ゴミとなって無駄にされています。



Slow Food®

食は地球の場所によって、異なるまたは相反する理由により無駄にされています。北部の国々では、過度の生産・購入により、しばしば食べられなくなる前に捨てられてしまいます。その上、消費者の多くは、飢えをしのいできたお年寄りの教えを忘れて、表面的な取り組みのみを行っています。これは料理をする能力を追求したり、文化の損失によってもたらされています。高価な肉の切り身と限られた種類の魚だけを注文する。調理するのがより簡単だからです。形が同一であるものに価値があると信じられているため、“規格外”の野菜や果物は不採用になり捨てられます。これでは恥ずべき量の食が焼却炉に行きつくのも無理ありません。そして償却するためのエネルギー消費もさらに必要となります。

一方で世界の南部の国々では、適切なインフラや保存手段、時間の効率的な輸送などの不足が食べ物を無駄にしています。また、有機燃料・有機ガスの生産競争のため、そして食用動物の大量の飼料としても無駄にされています。この競争は、地球のいくつかの地域では、農業ビジネスの投機家の利益にひどく不均衡をもたらしています。

この状況を前に、生産性を第1とする方法は成り立ちません。私たちはこのような状況を、できるならばひっくり返さなければなりません。私たちは、ますます大地にストレスを与えるようなやり方を続けることを、受け入れることはできません。生産性を失わないためにより強力な化学肥料が必要となり、その結果地層の地下水はますます汚染され役に立たなくなります。とりわけ、無駄をベースとしたシステムに関して議論せずに、現状を改善することはできません。

生産性と無駄は、相互に補完的な役割をし、食の技術主義に道を開いています。リスクはと言えば、本来は存在しない不足を奇跡的に解決する技術を探求している科学信奉者に、その扉を決定的にあげ広げることです。

私たちは無駄と闘い、消費する瞬間にも、食の価値とその神聖さを認識しなくてはなりません。食べ物を無駄にすることは、愚かで良識を欠き、代価が高い以外に、不道德な行為です。

しかしながら、強調されるべきなのは、私たちが消費者・生産者・仲介者としての役割を担うシステム自体が、無駄と過剰生産、在庫の早急な廃棄という、市場に新製品を導入するためのメカニズムに根差しているという事実です。言いかえれば、無駄はシステムの構成物であって、過程における偶然の産物ではないのです。もしこのメカニズムが邪悪なものであったとしても、商品の話になってしまえば、かろうじて受容できるものになってしまいます。食が機械の歯車ようになってしまえば、持続するのは難しくなるでしょう。残念ながら、工業化農業のアプローチによる食はもはや、どうみても商品であり、その価値はもっぱら値段と結びついていきます。投機し、賭けることのできる商品、その他の商品と同様に支障なく迅速に出回らなければならない。私たちが生きる消費社会では、生産－消費－廃棄－生産というサイクルを止めることは考えられていません。むしろ、目的はこの終了と再出発の循環の環をできるだけ加速させることです。スローフードは文明の闘いに対抗しなければなりません。世界の飢餓は敗北し、無駄への闘いがこの争いの象徴とならなければならないし、なることができるのです。商品としてのマークを一度外して、再び食の概念に価値を与え直さなければなりません。

3.3 地域経済と参加型民主主義

地域レベルの活動は、地域の要求を尊重し、生産される食べ物を通して、もしくは私たちの食べものを選択するという行為を通して、地域を精力的に保護できるようになります。私たちのコンヴィヴィウムと食コミュニティは、私たちがその一員として組み込まれている、信頼できるサイズの生命システムが、建設的な方法で機能するように行動し、実践する場所です。実際に変化を促すことができるのは、地域規模においてです。なぜなら私たちは、自分の地域とその限界や、詳細な情報まで知っているし、その価値を活かし欠点を修正する事ができ、それらを含めて地域を養う可能性を持っているからです。

私たちが最もすべきことは、地域規模の活動を支援し実行する事なのです。地域規模で活動する事は特に、地域経済を推進する事を意味します。家庭そのもの、地域そのものの面倒を見る、倫理的な行為に着手する、または既に存在するそれを広げる。これらは、食の生産、流通、または買い物をするときの選択という領域で行う事ができます。地域規模で共生産者となるのはとても簡単です。生産者が満足を得られ、公正な報酬を得られるよう、彼らの生活状況がきちんとしたものなるように助け合う。共生産者が、自己のためにも生産者のためにも公正な価格で購入できるように働きかける。私たちが切望する小さくてたくましい変化に乗り出すための最良の方法は、私たちの生活、私たちの振る舞い、地域と地域に暮らす人々との関係から始めることです。

小さな規模の生産を、絶えず支えていかなければなりません。なぜなら地域規模での生産、主にコミュニティ自身のための生産は、農業システムそのものの未来になるからです。土地を世話する人が、土地を世話する自分たちのために実行することなので、動植物の在来品種つまり生物多様性を守ることもできるようになります。土・水・エネルギーのような資源を、未来にも再生し利用可能にできるようにするために過度に搾取しないようにすることができます。小さなスケールでは、伝統的な民間の知識を、親から子へだけで



Slow Food®

なく、農業者から農業者へ伝承することができるようになります。小規模地域経済は、知識の保存と普及の場であり、アイデンティティーの形成の場、個人やコミュニティの主張の場です。同時にそれらは、まさにテッラ・マードレのネットワーク内で行われている様に、交換のための必要条件であり確認された条件なのです。小規模生産・流通システムや地域経済システムを構築するつもりはありません。なぜならそれらは内部で閉鎖的に停滞してしまうからです。私たちはもっと全面的な開放を実践できるよう、協力的で自立的であってほしいのです。私たちはすでに、地域経済なくしてはテッラ・マードレは存在し得なかった、生産者と共生産者は存在し得なかったことを知っています。それなしには、彼らの間の交流、知識や商品、情報や変革、誠実な友情というやり取りすら存在し得なかったでしょう。

小規模生産は、過去へ戻るのではなく、最高に近代的なことなのだということを強調しなければいけません。単に経済という視点からしても、多くの小規模経済は、大規模・世界規模のシステムと少なくとも同じ程度生産しているということが実証されています。個人的なものから世界的なものまで全てのレベルへで、豊かさや福祉の配分のより公正で持続的なシステムなのです。

地域経済と小さな規模は、最終的にはより直接的な参加型民主主義の形を生みます。一つのコミュニティの完全な形として参加する事ができ、コミュニティを積極的な形で活性化させ、生産的にすることができます。これらは、私たちや大地の権利の様な重要な問題に関して、誰かに決定させるままする代わりに、私たちの友人とともに私たちの生活を統治できるようにしてくれます。私たちはこれらのシステムの要になることができます。このシステムとは多様性、アイデンティティー、持続性、喜び、エコ農業、模範の交替、饗宴と恵みの場所です。そこは喜びと食の権利のある場所であり、“実存的な主権”のある場所、どのように食糧を摂取するかを選択の自由のある場所です。

3.4 恒久的な教育

これまでに述べた全てに共通するキーワードは「教育」です。行動や文化における変化を補完する教育活動を実践しなければ、それらに変化は起こりません。教育活動はまずそれ自体を議論的にするという課題があり、最初にそれ自体の方法論を、それから今後教育されるだろう内容を改革していかなければなりません。2010年にトリノで議論した様に、「教育する事は未来を創造する事を意味する」のだとしたら、私たちが準備している未来の質は、私たちが提供でき得る教育の質と量によります。

誰が誰を教育するのか？教育活動の内容はどうあるべきか？形態は？

最初の質問に対する回答は簡単過ぎて惑わされてしまいます。「皆が皆を教育する」。これは否めません。そして、私たちの日常経験の一部です。知っていること、理解したこと、資料から多重に学んだことを、これまた多数の意見によって検証して正していく。自覚していようがまいが、私たちは絶えず誰かや何かによる教育行動にさらされています。同様に否定できないことは、これには何よりも有効な教育要素があり、特に意図を表明しない教育当事者がいるということです。やはり(まだ、相変わらず)市場システムは教育訓練の強力な主役ですが、現在普及している教育内容やメッセージは、今まで私たちが話した権利、とりわけ、全ての人のためのおいしく・きれいで・たっだしい食の権利が保障される世界という、私たちのアイデアとは調和しません。また別の重要な教育の主役はずなわち学校ですが、私たちが訴える変化を機能させるようにする前に、教育システムそのものが、改革的プロセスを必要としているということ、そして普遍的な福祉と公正さに向かわなければならないということを確認しなければなりません。

それから私たちや私たちの様な協会もあります。私たちの教育の潜在能力は非常に高く、実践しながら教える、試食し、においをかぎ、観察し、栽培しながら学ぶというその具体性は際立っています。味覚ラボラトリー、その後のスクールガーデンの経験は、年々作成される教育プログラムの量と協会の絶え間ない出版活動と相まって、私たちを味・環境・食農につながる教育のベンチマークとなるよう成長させてくれました。これら全ての経験と能力が2004年、食科学大学を生み出しました。

私たちは若者に、支援し取り組んでいる活動を実践するため、必要な手段を保障しなければいけません。将来の世代は私たちの最も大きな投資です。かれらは食を生活の中心に据えることができなければならないし、栽培し共生産者になる事がどれだけ重要かという完全な自覚とともに大地へ回帰する事ができなければならない。これには、学際的・多面的教育ビジョンと包括的アプローチが必要になります。私たちの大学では毎年多くの新たなガストロノミーを育成しています。彼らは、地球が全てを支え、多面的・学際的でオープンなアプローチで学ばなければ、生態系—なぜなら食は生態系ですから—を理解する事はできないということを確認して把握しています。

そこでここに、何が私たちの教育活動の主な内容となるべきか、についてですが、それは多面性と連結します。もちろん個別の要素を学ぶ必要もありますが、同じく念入りにそれらを結ぶ相互の力学を学ぶ必要があります。農業生産のためのミツバチの役割や、化学に基づく農業がこの小さな虫達にどのような被害を引き



Slow Food®

起こしているかを知らない、ハチミツ試食の専門家はありません。教育なしには、真の食の価値の自覚は得られません。この能力—質と価値を見分けること—が欠けていると、唯一の選択基準は価格となります。そうすると市場に導かれた産業型農業が勝利するのです。なぜなら価格を下げられる影響力とそれが行える傲岸を握っているからです。

私たちが行う教育方法にもまた、一片の変化が必要です。変化への全ての当事者、言いかえれば変化の実現を目にしたいと思う全ての人々には、同等の尊厳があります。それは知の源泉です。研究者、子どもたち、植物、動物、お年寄り、青年、生産者、それぞれが必要な知識の会員証を持っていて、それぞれが知っていることや他人から学んだことを伝える方法と場所を見つけなければなりません。

スローフードが今後数年の間に着手する目標の全てには、教育活動が含まれています。それらを見無視することはできません。またこのためにも、食の持続可能な生産に本質的に関連した教育活動が承認され、コミュニティの文化遺産の保護と更なる価値の要素として利用されるように、私たちは、国や国家を超えた政策を刺激する伝承者にならなければなりません。

私たちスローフードは、世界各地でより多くのレベル、異なる背景で、全ての人(子どもからお年寄り、農業者からエンジニアまで)を巻き込むながら、教育に力を注ぎます。相互性、饗宴、小規模、共通福祉の保護という原動力を支援し活かすモデルに従って、この分野においてさらに邁進するよう決意します。私たちはより浸透性を持たなければなりません。ついに食の中心的役割りとなる未来を奪回するという、価値ある共通の目的を達成する可能性を増大させるため、私たちと同じ精神で教育活動を行う人々をつなげ歓迎しなければなりません。